

字余りの変遷

——平成 15 年春季上代文学会公開講演・概要並びに配布資料——

宮 澤 俊 雅

1

字余りの変遷という題目を掲げまして、字余り句が、短歌の定型の中でどのように扱われて来たかを、古代から、中世、そして現代まで辿ってみようと思います。ただし時代順に古代から、ということではなくて、現代、古代、中世を順序も無く飛び飛びにお話いたします。

まず、現代の短歌では、

新二条定型〔モーラ定数定型〕

| | |
|-----------|-------|
| 第 1・3 句 | 5 モーラ |
| 第 2・4・5 句 | 7 モーラ |

というのが最も一般的な定型です。よく 5 ^{おん}音・7 ^{おん}音というふうには、「^{おん}音」を単位として数えますが、「^{おん}音」では、いかにもあいまいです。5 音節とか 7 拍とかいう言い方をするかもしれませんが、1 音節は必ずしも 1 モーラではなく、1 拍は、韻律論者は普通 2 モーラのことを 1 拍と数えます。定型を数える場合、音数の単位にはモーラを用いるのが一番紛らわしくありません。現代日本語は一部の方言を除いて、音節ではなく、モーラを以て、音数の単位としている言語、**モーラ語**です。短歌や俳句、定型詩などでは、モーラの数数えることによって定型であることが認識されます。

さて、いまここに示しました現代短歌の定型、これを仮に**新二条定型**と呼んでおきますが、ここでは、5 モーラ又は 7 モーラが定型であって、**字余り・字足らずは定型破り**ということになります。字余り・字足らずは条件付で認められる許容事項で、字余りにした方が、定型に収めるよりもはるかに文芸性がある場合に限って、字余りを容認する、ということになります。従って、新二条定型では字余りにしてよいかどうかは、一般人には判断できない訳であり、業界内で特に短歌を評価し、査定することのできる、選者階級の裁定に任されることになります。

この新二条定型は、中世の二条派歌壇が堅持した「二条定型」を近代歌人がより厳しい形で実践して成立させたものです。二条派歌壇は、古今和歌集を模範としましたが、近代歌人はこれに反発し、万葉集を称揚しました。しかし、今から 100 年程前に

(2)

行われていた、万葉集の歌は、古今集にくらべると字余り・字足らずの多いものでした。万葉集を持ち上げると字余り・字足らずを推奨することになります。これが高じると「二条定型」が崩れ、後に述べる「京極定型」を容認することとなり、その先には自由律短歌が待っています。

自由律の立場からは、万葉の字余りを積極的に評価し、これを諧調といひます。それに対し、定型派は、字余りをあくまでも定型破りとして破調といひます。

短歌の実作の方では、定型派は自由律によって定型が崩れるのを恐れ、字余りの許容条件を厳しくします。字余りは破調であり、許容事項であつて、高度の文芸性を表出する時のみ許される文芸技巧として位置づけられます。

昭和中期以後の字余り研究は、短歌実作者の動向に合わせる形で、専ら字余りを、「破調」「許容事項」と見て、その文芸性・文芸技巧としての効果を中心にして論ぜられて来ました。万葉集の短歌字余りについても、それを古代定型の枠内で捉えるよりは、新二条定型の立場から論じ、なぜ字余りになるのか、或いは、なぜ字余りにならないのかを、文芸性だけでなく、その音韻の性格、或いはモーラ構造の違いに求めるなど、字余りを許容事項として扱った研究が行われています。

さて、短歌の実作の世界では新二条定型が普通なのですが、韻律論者のほうでは、必ずしもそうではないようです。多くの韻律論者は2モーラを以て1拍子・1拍と捉え、短歌を3・4・3・4・4の拍から成ると捉えているようです。つまり、短歌は、6・8・6・8・8モーラで構成され、各句の中の1モーラが普通は休符になる、というものです。

[70年代の2モーラ=1拍(子)・論]

- 1973.03 藤村 靖「リズムと文法」ユリイカ昭和48年3月号
- 1973.03 林 光「七五調そのほか・メモ」ユリイカ昭和48年3月号
- 1973.03 藤田竜生「リズムの文化論」ユリイカ昭和48年3月号
- 1975.11 坂野信彦「短歌形式論——拍と音の弁証法」短歌22巻11号
- 1977.10 別宮貞徳『日本語のリズム』講談社現代新書488
- 1978.02 寺杉雅人「等時音律説試論——定型詩歌をどうよむべきか——」文学46巻2号

さらに、休符をもっと増やし、短歌全体を4拍子で捉える人もいます。

♪♪♪

としのうちに はるはきにけり ひととせを

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

こぞとやいはむ ことしとやいはむ

ともかく、ここでの現代短歌の定型は

| | |
|---------------|--------------|
| 新京極定型〔句頭転声定型〕 | |
| 第1・3句 | 5モーラ 又は 6モーラ |
| 第2・4・5句 | 7モーラ 又は 8モーラ |

となります。ここでは6モーラ・8モーラは定型のうちに入り、破調とはなりません。これは中世京極歌壇の用いた定型と似ています。しかし、やはり中世と現代では違いがありますので、こちらの方も「新」をつけて**新京極定型**と仮に呼んでおきます。

2

さて、ここで話を古代短歌の定型に移すことに致します。万葉集・三代集の時代には、短歌は**古代定型**によって作られていました。古代定型とは

| | |
|--------------|-----|
| 古代定型〔音節定数定型〕 | |
| 第1・3句 | 5音節 |
| 第2・4・5句 | 7音節 |

というものです。奈良時代及び平安時代の初期・中期の短歌のいわゆる**字余り句**には必ず句の途中に「あ」「い」「う」「お」のいずれかの文字が含まれています。例えば、

きみをおもひ あがこひまくは あらたまの たつつきごとに こふるひあらめや (万葉3683)

としのうちに はるはきにけり ひととせを こぞとやいはむ ことしとやいはむ (古今0001)

わたつうみの おきつしほあひに うかぶあわの きえぬものから よるかたもなし (古今0910)

このように「字余り句」の中には必ず「あ」「い」「う」「お」のいずれかの文字が使われています。この「あ」「い」「う」「お」を含む句は、普通に発音すれば、

きみをおもひ ki- mi- 'uo 'o- mo- pi:

こふるひあらめや kuo pu- ru- pi: 'a- ra- mei 'ia

としのうちに to- ci- no- 'u- ti- ni-

ことしとやいはむ ko- to- ci- to- 'ia 'i- pa- mu:

わたつうみの 'ua ta- tu- 'u- mi- no-

おきつしほあひに 'o- ki- tu- ci- po- 'a- pi- ni-

うかぶあわの 'u- kam bu- 'a- 'ua no-

(4)

のように6音節か8音節の発音になりますが、和歌の定型として読むときは、

きみをおもひ ki- mi- uoo mo- pi:
こふるひあらめや kuo pu- ru- pia ra- mei 'ia

としのうちに to- ci- nou ti- ni-
ことしとやいはむ ko- to- ci- to- iai pa- mu:

わたつうみの 'ua ta- tuu mi- no-
おきつしほあひに 'o- ki- tu- ci- poa pi- ni-
うかぶあわの 'u- kam bua 'ua no-

のように、5音節か7音節で発音することが可能です。一方、「こぞとやいはむ」のような^{じかない}字適句の場合は、もともと普通には7音節で発音されるものですから、和歌の定型として読むときにも

こぞとやいはむ kon zo- to- 'ia 'i- pa- mu-

と7音節での発音が可能です。

字余りの多い歌(古今0910)と字余りの無い歌(古今0005)を例に音節を示しますと、

わたつうみの 'ua ta- tuu mi- no-
おきつしほあひに 'o- ki- tu- ci- poa pi- ni-
うかぶあわの 'u- kam bua ua- no-
きえぬものから ki- 'ie nu- mo- no- ka- ra-
よるかたもなし 'io ru- ka- ta- mo- na- ci: (古今0910)

うめがえに 'u- mie nga 'ie ni-
きみるうぐひす ki- 'ui ru- 'un gu- pi- cu-
はるかけて pa- ru: ka- kie tie
なけどもいまだ na- ken do- mo- 'i- man da-
ゆきはふりつつ 'iu ki- pa- pu- ri- tu- tu- (古今0005)

このようにどちらも、5・7・5・7・7音節で発音することができます。字余りがあっても無くても、和歌の定型として読むときは両者に違いはありません。

古今集1番歌で、字適句の「こぞとやいはむ」と字余り句の「ことしとやいはむ」は、どちらも句の中に「やーい」という音連続があります。現代人からみれば、/jai/

は2モーラとなり、「こぞとやいはむ」は7モーラの字適で定型、「ことしとやいはむ」は8モーラの字余りで新二条定型では定型破りということになります。しかし古代人は和歌を詠む際にモーラではなく、音節で音数を数えていました。ですから「やい」という音連続は「や」「い」と2音節に切って発音することもできるし、「やい」と重母音で1音節に発音することもできます。

こぞとやいはむ kon zo- to- 'ia 'i- pa- mu-
ことしとやいはむ ko- to- ci- to- iai pa- mu-

どちらも7音節です。古代人にとっていわゆる字余りは、破調でも諧調でもない、ごく普通の、定型の調子です。古代人には字余りという意識はありません。音節を単位とする古代定型の枠内で字余りを文芸技巧として捉えることはできません。

もう少し古代定型と字余りの例を見ておきましょう。

からごろも ka- ran go- ro- mo-
 きつつなれにし ki: tu- tu- na- rie ni- ci-
つましあれば tu- ma- cia rie- mba
 はるばるきぬる pa- rum ba- ru- ki: nu- ru-
たびをしぞおもふ tam bi- 'uo cin zoo mo- pu-

なにしおはば na: ni- cio pam ba-
 いざこととはむ 'in za- ko- to- to- pa- mu-
 みやこどり mi- 'ia kon do- ri-
わがおもふひとは uan gao mo- pu- pi- to- pa-
 ありやなしやと 'a- ri: 'ia na- ci: 'ia to-

阿耨多羅 'a- no- ku- ta- ra-
 三藐三菩提の cam mia ku- cam bon dai no-
 ほとけたち po- to- kie ta- ti-
 わがたつそまに uan ga- ta- tu- co- ma- ni-
冥加あらせたまへ mia ngaa ra- cie ta- ma- pie

このように、字余り句の「あ」「い」「う」「お」は音声的に母音だけの音節ですので、直前の音節の母音と連続して1音節の重母音で発音できます。字余り句には必ず「あ」「い」「う」「お」のいずれかの文字がある、ということになるわけです〔「え」は重母音なので字余りと無関係〕。

3

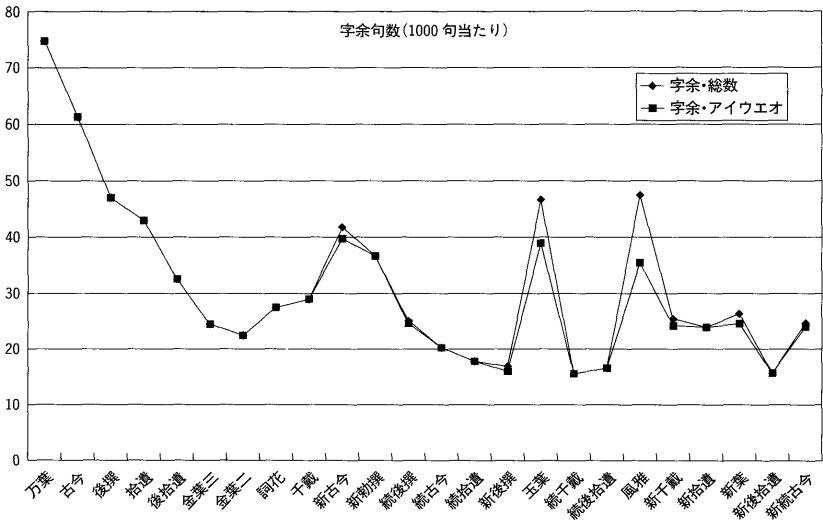
古代人が字余りを意識するようになるのは、11世紀になってからです。それは「ア行のオ」と「ワ行のオ」が同じ音になったことから始まりました。それまでは「ア行のオ」は単純な o: という発音で、「ワ行のヲ」は uo という重母音でした。ところが、「ア行のオ」も「ワ行のヲ」と同じ uo という重母音となりましたから、それまで

なにしおはば na: ni- cio pam ba-
 わがおもふひとは uan gao mo- pu- pi- to- ua-

と5音節・7音節で発音していたものが、

なにしおはば na: ni- ci- 'uo uam ba-
 わがおもふひとは uan ga- 'uo mo- 'u: pi- to- ua-

と、6音節・8音節で発音することとなりました。それまでは、発音しさえすれば、字余りでも、5音節か7音節になるので、定型を守っていると認識できましたが、今度は、6音節・8音節になってしまうのに、なぜそれが定型破りにならないのかが、分からなくなりました。そこで、定型を守ろうとすると字余りを作らないように努めることとなります。八代集の中では金葉集が最も字余りの少ない歌集となっています。



そして12世紀半ばになりますと、新しい「字余り」が生まれますが、その前に「さもあらばあれ」という句について見ておきましょう。「さもあらばあれ」は一種の決まり文句で、和歌には10世紀ごろから使われるようになりました。この言葉は実際には、

さまらばれ ca- ma: ram ba: rie

と発音されていたようで、最初は5音節相当の語句として第1句、第3句に読まれていましたが、12世紀半ばごろから第2・5句にも読まれるようになります。一覧表に示してありますが、一番左に西暦を掲げてあります。これは私家集や作者の個人名が挙がっているところは、その人の生まれた年代が示してあります。

一番早い825年生まれの業平の歌、これは右側にあるように、伊勢物語と新古今和歌集に載るもので、果たして本当に業平の歌であるかどうか、また本来伊勢物語にあった歌なのかどうかわかりません。次の923年生まれの仲文のものとして挙がっているのは、『仲文集』に載っているもので、右側に「女」と示してあるように、この歌の作者は仲文ではなく、女性です。仲文の同世代と見て良いでしょう。新古今の業平のものを別にすれば、このあとずっと5音節相当のものが続きます。そして1120年生まれの小侍従と、小侍従と同世代の寂然以後になって7音に相当する

さもあらばあれ ca- mo- 'a- ram ba- 'a- rie

が現れます。これは音節として数えるというよりは、現代と同様に、モーラで数えていると見てもおかしくありません。[「さもあらばあれ」についての論には、2003.02 古田恵美子「中国語「遮莫」「任他」等の受容と「さもあらばあれ」(横浜国立大学教育人間科学部紀要II(人文科学)No. 5)がある。]

そして、このころから、句の途中に「あ」「い」「う」「お」が含まれていない字余りが作られるようになります。

ながめわびぬ いまよりほかの やどもがな のにもやまにも つきやすむらむ (新古今 0380・式子内親王)
あきかぜの そでにふきまく みねのくもを つばさにかけて かりもなくなり (新古今 0506・家隆)
おもひおく ひとのこころに したはれて つゆわくるそでの かへりぬるかな (新古今 0988・西行)

この種の字余りは、この後、玉葉和歌集・風雅和歌集に多く見られます。音節を単位とする古代定型は12世紀頃から崩れ、これ以後は、モーラ数で数える中世定型に移ります。しかし、ここで新しい問題が生じます。さきほども言いましたように、古代人は字余りでも、それを発音しさえすれば、5音節か7音節になるので、定型を守っていると認識できました。その同じ字余りを、今度は、中世の人が読むと6モー

| | | | | | | | |
|------|------|----------------|----------------|----------------|----------|----------------|-----------|
| 0825 | 業平 | おもふには | しのふることそ | まげにける | あふにしかへは | <u>さもあらばあれ</u> | 新古今古今伊勢物語 |
| 0923 | 仲文 | たらちめの | むかしのおやは | <u>さもあらばあれ</u> | さてやはむまの | かみのこはよき | 女 |
| 0934 | 高光 | <u>さもあらばあれ</u> | ひとのきくらむ | こともいさ | てのかりなる | ものをおもへは | |
| | 増基 | <u>さもあらばあれ</u> | つきいててさも | いりぬれは | みるへきひとの | あるみやこかは | |
| | 古今六帖 | よしのかは | よしのかはれよ | <u>さもあらばあれ</u> | せになるふちは | なくほこそあらめ | |
| 0950 | 小大君 | ひたふるに | しなはなかなか | <u>さもあらばあれ</u> | いきてかひなき | ものおもふみは | 男・拾遺 |
| | 赤染衛門 | <u>さもあらばあれ</u> | やまとこころし | かしこくは | ぼそちにつけて | あらずはかりそ | 後拾遺 |
| 0977 | 源賢 | <u>さもあらばあれ</u> | ひとはみすとも | はなのきは | かせかくれにそ | ううへかりける | |
| | 和泉武部 | <u>さもあらばあれ</u> | くもゐなからも | やまのはに | いていするよひも | つきとたにみは | |
| | 後拾遺 | むはたまの | よはのけしきは | <u>さもあらばあれ</u> | ひとのこころの | はるひともかな | 新勅 |
| | 為仲 | ひとしれぬ | なかにぬるは | <u>さもあらばあれ</u> | さらてかはらぬ | そてやたれゆゑ | 童木 |
| | 為仲 | しつむとも | いまはわかみは | <u>さもあらばあれ</u> | こひしきひとを | みぬそかなしき | |
| 1016 | 経信 | <u>さもあらばあれ</u> | くれゆくはるも | くものうへに | ちることしらぬ | はなしにほはは | 新古今 |
| 1096 | 歌合 | <u>さもあらばあれ</u> | ひとこゑなれと | ほととぎす | きかてぬるよは | なきよもかな | |
| 1097 | 忠通 | わざれしよ | よそのなきけは | <u>さもあらばあれ</u> | うきみなりとも | あててこそめ | |
| | 雅光 | <u>さもあらばあれ</u> | なみたのかはは | いかせむ | あひみぬなきへ | なかさすもかな | |
| 1104 | 清輔 | <u>さもあらばあれ</u> | あるしはいかに | おもふとも | をみなへしには | みをもかへてむ | |
| 1120 | 小侍従 | はきかはなく | おもげにみゆる | つゆはかり | ちらさむかせは | <u>さもあらばあれ</u> | 夫木 |
| | 寂然 | ききすなく | みやきはらの | かすめるは | はなみるあきも | そりはてぬるか | 最厳・後葉 |
| | 詞花 | みかりのの | しはしのこひは | <u>さもあらばあれ</u> | いほととも | つきのひかりは | |
| 1128 | 重家 | <u>さもあらばあれ</u> | くちたるきとは | たえはては | いほるとも | われひとりやは | |
| 1128 | 重家 | <u>さもあらばあれ</u> | あひみちのちに | <u>さもあらばあれ</u> | なほたちかへり | あきときかはや | |
| 1128 | 重家 | ふゆきてと | たのめしひとも | <u>さもあらばあれ</u> | たしはなれは | ゆかさらめやは | |
| | 教長 | つつけてける | はもりのしるし | <u>さもあらばあれ</u> | たまのうてなよ | <u>さもあらばあれ</u> | |
| | 有房 | おもふには | たけのあみしき | <u>さもあらばあれ</u> | しのにおしなみ | つもれしらゆき | |
| | 有房 | しをれむ | まかきのたけは | <u>さもあらばあれ</u> | うきをしのはぬ | ころともかな | 千載 |
| | 有房 | おもふをも | わするるひとは | <u>さもあらばあれ</u> | すみぬれは | <u>さもあらばあれ</u> | 実定 |
| 1139 | 林下 | つきをみて | こころのみつと | <u>さもあらばあれ</u> | うれしくもるも | ゆきにあみぬる | |
| | 山家 | あととむる | こまのゆくへは | <u>さもあらばあれ</u> | こむよもかくや | くるしかるへき | 西行 |
| | 山家 | あはれあはれ | このよはよしや | <u>さもあらばあれ</u> | ふゆのよふかき | まつかせのおと | |
| | 式子 | いろいろの | はなもみちも | <u>さもあらばあれ</u> | かをるよは | まづかれぬる | |
| 1150 | 久安百首 | さいみたれに | はなたれはなの | <u>さもあらばあれ</u> | かをるよは | たたみにしむは | 崇徳院・千載 |
| 1150 | 久安百首 | はるはなほ | はなのにほひも | <u>さもあらばあれ</u> | おもふへき | よそのひとめは | 季通・千載 |
| 1155 | 拾玉 | つかへつる | かみはいかに | <u>さもあらばあれ</u> | ななめてけりな | <u>さもあらばあれ</u> | 新古今 |
| 1155 | 拾玉 | しはのにと | しほはむはなほ | <u>さもあらばあれ</u> | ころをむに | うらめしのみや | |
| 1155 | 拾玉 | <u>さもあらばあれ</u> | はるのなきはの | <u>さもあらばあれ</u> | ひとりこころの | つきをみるかな | |
| 1155 | 拾玉 | よそにしらぬ | ひとのけしきは | <u>さもあらばあれ</u> | けふはあたにも | ちらさすもかな | |
| 1155 | 拾玉 | やまさくら | きのふもあすも | <u>さもあらばあれ</u> | ころはふはの | そらよりそゆく | |
| 1155 | 拾玉 | みはかりは | のちもやまちも | <u>さもあらばあれ</u> | みちそよき | <u>さもあらばあれ</u> | |
| 1155 | 拾玉 | それもない | いそちのすゑも | <u>さもあらばあれ</u> | さてかくあとも | おもひならずや | |
| 1155 | 拾玉 | するすみを | あらふなみたは | <u>さもあらばあれ</u> | ふかくあらぼ | <u>さもあらばあれ</u> | |
| 1155 | 拾玉 | しくれゆく | こころのいろし | <u>さもあらばあれ</u> | おくらはや | <u>さもあらばあれ</u> | |
| 1155 | 拾玉 | せめてたた | ひととせたにを | <u>さもあらばあれ</u> | かすかのの | さくやむめかえ | |
| 1158 | 壬二 | わかなをや | <u>さもあらばあれ</u> | <u>さもあらばあれ</u> | よのまのきくら | なをたてずは | |
| 1158 | 壬二 | かすみたつ | あすのはるひも | <u>さもあらばあれ</u> | きみかためてふ | みよしののほる | |
| 1162 | 拾遺愚 | あらはれむ | そのにしききは | <u>さもあらばあれ</u> | なかにくらす | はるのひくらし | 夫木・定家 |
| 1162 | 拾遺愚 | <u>さもあらばあれ</u> | はなよりほかの | <u>さもあらばあれ</u> | ゆらのみさきの | ひともしのはし | 玉葉・定家 |
| 1162 | 拾遺愚 | はなとりの | にほひもこゑも | <u>さもあらばあれ</u> | はしはしら | あきのつかせ | |
| 1162 | 拾遺愚 | <u>さもあらばあれ</u> | なのみなからの | <u>さもあらばあれ</u> | なりみはや | あきかせのそら | |
| 1162 | 拾員外 | よしのたたく | けふりはかりは | <u>さもあらばあれ</u> | はななくは | <u>さもあらばあれ</u> | |
| 1162 | 拾員外 | 哀しのたたく | さくらにさける | <u>さもあらばあれ</u> | はるといふころも | ちきりはかりを | |
| 1169 | 月清 | よのなかに | さくらにさける | <u>さもあらばあれ</u> | きかはやよるの | <u>さもあらばあれ</u> | |
| 1200 | 正治百首 | いはししの | なかのたえまは | <u>さもあらばあれ</u> | はななきみぬは | <u>さもあらばあれ</u> | 藤原隆親 |
| | 玄玉 | なにゆゑに | かすむこそゑを | <u>さもあらばあれ</u> | われはにこれに | さみたれやせし | 晴真法師 |
| | 玄玉 | よととも | はれぬこころは | <u>さもあらばあれ</u> | かはるふちせは | さみたれやとむ | |
| | 玉葉 | いせのうみや | きよなきさきは | <u>さもあらばあれ</u> | おもひかは | <u>さもあらばあれ</u> | 前僧正道性 |
| | 続千載 | ひとかたに | しつむわかみの | <u>さもあらばあれ</u> | おもひかは | <u>さもあらばあれ</u> | |

ラ・8モーラになってしまうのに、なぜそれが定型破りにならないのかが、分からなくなりました。句の中に「あ」「い」「う」「お」が有るからと言って、6モーラ・8モーラが5モーラ・7モーラで発音できるというふうにはなりません。「字余り」はどうしても定型の枠内では捉えられないものになります。そこでこの字余りを定型の中にどのように位置付けるか、その違いによって中世定型は二つに分かれます。

その一つは、仮に**二条定型**と呼んでおきますが、二条定型では、なるべく字余りは作らない、というのが原則になるでしょう。しかし三代集に例がある以上それを禁止することはできませんから、先例のある字余りは許容する、ということで、「あ」「い」「う」「お」を含む字余り句が少しは作られることとなります。現代の**新二条定型**とは、許容条件が違っているだけだということになります。二条定型は、モーラの数数えて定型を確保した訳で（モーラ定数定型）、6モーラ句と8モーラ句は定型性を乱す働きをすることになります。

一方、仮に**京極定型**とよぶ定型では、字余り句を多く作るようになります。もはや「あ」「い」「う」「お」があってもモーラ数は減りませんから、「あ」「い」「う」「お」があってもなくても、6モーラ・8モーラの句が字余りとして作られます。各句が5・6モーラあるいは7・8モーラですから、現代の**新京極定型**とどこがちがうか、というと、中世の場合は二条定型も京極定型も、ともに字余りを破調・定型破りと見る点は同じだったであろうという点です。京極定型も、二条定型と同様に、モーラの数数えて定型を確保し（モーラ定数定型）、字余りは破調を利用した表現技巧として働いていたと思われまます。

4

さて、現代に話を戻しますが、現代の短歌には、字余り・字足らずの外に、定型を乱すものとして、**句跨がり**あるいは**句跨ぎ**と呼ぶ技法があります。そして、この、句跨がりと字余りが定型とどのように関わっているか、という点が、人によって異なっているように思われます。

二・三、目に付いたものを、見てみましょう。

1998.01 岡井隆『今はじめる人のための短歌入門』（角川選書5、角川書店）

五句三一音の定跡を破るのは、あくまでも例外であります。例外は、止むを得ない理由が無い限り、許容すべきではありません。例外であるはずの、音数律破りが、どのように歌壇の作品にありふれているといたしましても、初心の人は、それはあくまで、自分たちの目標外のものとして、読み過ごしたほうがよろしいかとおもいます。

1999.12 荻原裕幸『『サラダ記念日』の出現』（岩波現代短歌辞典、岩波書店）

(10)

俵の作品のほとんどが、句またがりはあるけれども、字余りや字足らずのない、五七七七の総音数を守った定型のリズムを持っているのは、……………

1999.12 小塩卓也「句またがりと句割れ」(項目)(岩波現代短歌辞典、岩波書店)

句またがりとは、……今後ますます多用されていくだろう。

2001.04 田島邦彦『今日からはじめる 短歌の作り方』成美堂出版

字余り・字足らず 字余りはさほど気にしなくても、読み手はその句を定型感覚で素速く読んでくれます。

句跨り …… 古い韻律を打破し、歌の内容と表現を拡充する方法として、現在は定着しています。

私は句割れ・句跨りでも、五句に区切って読みます。凝縮した緊張感が新鮮です。

岡井氏は、字余りは許容すべきでない、と初心者利用を禁止しており、荻原氏は『サラダ記念日』の俵万智氏の作品が句跨りはあるけれども、字余りや字足らずのない、定型のリズムを持っている点を高く評価していますので、句跨りは容認できても字余りは許容できない立場であることがわかります。小塩氏、田島氏は、句跨りが歌壇全体で受け入れられているとして、その多用は咎めていません。この人たちの定型は、新二条定型であると考えられます。

新二条定型で定型を認識させるのは、5モーラ・7モーラという、句の中のモーラの数であって、モーラの数によって句を区切ってゆきます。字余り句の場合も、5モーラか7モーラで区切ろうとしますから、意味の区切りと定型の区切りの間に齟齬が生じ、定型の調子が乱れ、破調として認識されます。ですから字余りであることに気づくと、その所在を確認しておき、もう一度、字余り句を「素早く」読むようにして読み直すことになります。一方、句跨りは、字余りと字足らずのプラス・マイナスで帳尻が合うので、モーラの数によって句を区切っていても、定型の調子は乱れません。句跨りのある短歌を、句跨りのない普通の短歌と同じ調子で読んで、違和感を感じず、むしろ凝縮した新鮮な緊張感を感じます。新二条定型では、字余りの方が、句跨りよりも、定型破りとしての罪は重いのです。

2001.06 沖ななも『優雅に楽しむ 短歌』日東書院

非定型の歌 非定型でもリズムは絶対に必要……

少年貧時のかなしみは烙印のごときかなや夢さめてなほもなみだ溢れ出づ (坪野哲久)
あるときの部屋は檻とらにて老いしわれ、右を見、左を見、首をあげ、首を垂れ (鈴木幸輔)

自由律の歌 自由律は非定型よりもっと自由です。リズムは必要ですが、定型のリズムではなく、それぞれの歌のリズムでいいわけです。

野は青い一枚の木皿だ、我らを中心にして遠く廻転する（前田夕暮）

句またがりの歌 …… 定型という形が決まっているかのような印象を受けますが、実は、歌の形はさまざまです。こうでなければならないというものではありません。まずは自由に、そして思い切って、自分の表現してみたいことを言葉にしてみることです。

夕焼けの赤に吸われて透明の羽根より溶けてゆけあかとんぼ（浜田康敬）

わが愛するものに語らん榿の木に日が当り視よ冬すでに過ぐ（前田透）

沖氏は、非定型、自由律、句跨がりの例を挙げていますが、これからすると沖氏の定型感はかなり異色なものだと思われます。「非定型」に挙げた坪野氏の歌は 8 5 5 6 5 6 5 の自由律のようすし、鈴木氏の歌は 5 7 5 9 10 の超字余りのようす。自由律として挙げた前田氏の歌は 5 9 4 7 9 の超字余り・字足らず歌のようであり、句跨がりの例も取り立てて「句跨ぎ」として言挙げすべき歌ではありません。

2002.07 島田修三『短歌入門』池田書店。

字余り・字足らず …… 短歌の定型というのは、文字どおり五七五七七、三十一字の厳密なフレームをさすだけでなく、定型感という範囲まで含むものだと私は考えています。つまり、読者に短歌という定型を感じとらせるということが大事なのです。

1999.06 川本皓嗣・馬場あき子・佐々木幸綱「座談会 韻律と短歌」

（馬場あき子編『韻律から短歌の本質を問う』（短歌と日本人3）岩波書店）

川本 …… 最後に句跨ぎです。実は現代の短歌でもっとも大胆に用いられている破調の手法は、句跨ぎだと思えます。特に佐々木さんの歌の場合、韻律通りに読めば意味上の切れ目が損なわれ、意味に従って区切れれば韻律が漂流を始めるという強い緊張がある。……

もっと大胆なのは

深夜の火鉢に | 餅焼きながら | ふいにかの | 疎開地の少 | 年期が) 甦る

です。実はこういうものも、リズムの上ではちゃんと七五の枠に入っています。でも、その七五のリズムでそのまま読むと意味はめちゃくちゃになる。だから、定型リズムの感覚を一方で持ちつつ、意味のリズムで読んじゃうという緊張関係——よく「メトリック・リズム」と「スピーチ・リズム」というんですけども、

韻律のリズムとことばのリズムの対位法みたいなものが面白い、と。それが極端に行っている。

怒りの束^{たば}を | 掴んでついに | 立ち上がる | もう一つの^{みな}水無^{つき} | 月の) 生きざま

の「無」は移動休止なしにマスを全部埋めてしまった「な」ですけれども「水無月」という語をここでぶった切った、しかしリズムの計算は合うというのが面白いところです。

島田氏、川本氏は新京極定型であると思われます。島田氏は「字余り」の説明のところで、定型にとらわれず、字余りを使うことを薦めていますから、句跨ぎほどには字余りを咎めていないと見られます。

新京極定型では、意味の区切りが自然に定型の区切りになります。句の区切りの方が自然に出て来ますから、各句の中のモーラの数は、6モーラでも、あるいは8モーラでも気になりません。句の区切りの方が先にできているので1モーラ程度の増減は「読者に短歌の定型感を感じさせる」のに何の妨げにもなりません。しかし、句跨ぎの方は、意味の区切りで読むと、定型の区切りが消滅することが多く、その場合無理に定型の区切りを出して読むと、交通標語にも劣るふざけた響きが生じます。新京極定型では、句跨ぎの方が、字余りよりも、定型破りとしての罪は重いのです。

川本さんの「句跨ぎ」の説明は、例えば「七五のリズムでそのまま読むと意味はめちゃくちゃになる。」とか、移動休止なしに柵を全部埋めてしまった「な」が「水無月」という語をここでぶった切って、しかしリズムの計算は合うとかいうのは、新二条定型派からみれば「何を大袈裟な」ということになるでしょう。

現代短歌の定型として、新二条定型と新京極定型の二種があるというのは、決して短歌の表現技巧に二つの方向がある、ということではなくて、現代人のそれぞれ各自が独自に定型感を持っている、ということです。字余りを定型破りと感じる人と、句跨ぎを定型破りと感じる人とがいる、ということです。

さきほど、『サラダ記念日』の名が出ていましたので、これを例にしてそれぞれに、字余りと句跨ぎがどのように感じられるのかを見てみましょう。

1987.05 俵万智『サラダ記念日』河出書房新社

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ
おみやげの讃岐うどんが社名入り封筒の中からあらわれる
思い出はミックスベジタブルのよう けれど解凍してはいけな
明けてゆく TOKIO の隅の販売機にて購いし二本のコーラ

すれ違いざまに会釈を交せしはいつもの八百屋のあんちゃんなりき

新二条定型では、定型の「寒いねと」の歌は、こんなふうになります。

さむいねと-はなしかければ-さむいねと-こたえるひとの-いるあたたかさ

5・7・5・7・7の定型ですが、この第1句を「寒いわね」とに、第3句を「寒いよね」とに作り替えたものを、定型のつもりでモーラの数によって区切って読んで行くと、

さむいわね-とはなしかけれ-ばさむいよ-ねとこたえるひ-とのいるあたた-かさ

というふうに、句を途中で分断してしまい、定型を認識できなくなります。そこで定型の流れによって読まず、あらかじめ字余りであることを認識して、その部分だけ素早く読まねばなりません。

さむいわねと-はなしかければ-さむいよねと-こたえるひとの-いるあたたかさ

しかし、全部の句を字余りにして

さむいわねと-わたしがゆーたら-さむいよねと-あなたがこたえる-なにかあたたかい

とした場合には、全部の句を素早く読んでも定型性を保持する効果はありません。

一方、句跨がりの場合は、普通の文として読んだ場合と定型を意識して詠んだ場合

おみやげの-さぬきうどんが-社めーいり-ふーとーの-なから-あらわれる

おみやげの-さぬきうどんが-社めーいり-ふーとーの-な-から-あらわれる

それほど大きな違いはありません。定型を意識して読んで行くときは、モーラの数によって句切って行きますから、句跨ぎは、意味の上では区切れない所を、発音の際にちょっと切るだけで済みます。しかし字余りは、モーラの数によって句切って読んで行くと、句を途中で分断してしまいます。そこで定型の流れによって読まず、あらかじめ字余りであることを認識して、その部分だけ6モーラなり8モーラなりで区切って読まねばなりません。この部分では定型を認識できにくくなります。

次に、字余りも句跨ぎも、どちらも定型破りにならない、という定型意識もあるかと考えられます。句の調子に一つの型しかないために起こるものですので、**一型定型**

(14)

と呼んでおきますが、定型は、こんなふうになります。

さむいねとはなしかければさむいねとこたえるひとのいるあたたかさ

これを全部字余りにしますと

さむいわねとわたしがいったらさむいよねとあなたがこたえるなにかあたたかい

となります。それぞれの句が同じような調子で発音され、この一定の調子を持ったまとまりが、句のまとまりとして認識されます。字余りの余分な1モーラも、繰り返される一定の調子の中に溶け込んでしまって、定型という感じを乱すことはありません。句跨ぎの場合は、普通の文として読んだ場合と定型を意識して読んだ場合とで

おみやげのさぬきうどんが-社め-いりふ-と-の-なかからあらわれる
おみやげのさぬきうどんが社め-いりふ-と-の-なかからあらわれる

こんなふうに違うわけですが、普通の文の場合は複数の文節のまとまりが単位になります。定型を意識した場合はそれぞれの句のまとまりが単位になります。一つの単位は同じような調子で発音されます。この一定の調子を持ったまとまりが、定型の場合には句のまとまりとして認識されます。ですから、字余りも句跨ぎも、定型として繰り返される一定の調子の繋ぎ目の部分に溶け込んでしまって、定型という感じを乱すことはありません〔上掲、浜田氏の「羽根より溶けてゆけ赤とんぼ」は新京極定型では7・7の力強い定型であるが、一型定型では「シオカラトンボ」と同じ調子(湯気闊伽蜻蛉?)になるのを避けると「羽根より溶けてゆけ」「赤とんぼ」と区切って発音せざるをえない〕。

最後に、新京極定型では、字余りも句跨ぎもなければ、普通の文として読んだ場合と、定型として読んだ場合とで余り違いはありません。普通の文として読めば、

寒いねと- 話しかければ- 寒いねと- 答える- 人の- 居る- 暖かさ

こんなふうに、文節の区切りが明瞭に出て、それが句のまとまりとして認識できます。定型を意識して読んだ場合には

寒いねと- 話しかければ- 寒いねと- 答える- 人の- 居る- 暖かさ

せいぜいこの程度の違いでしょう。全部を字余りにすると、

寒いよねと- 私が-言ったら- 寒いよねと- あなたが-答える- 何か-暖かい

となります。文節の区切りが明瞭に出て、それが句のまとまりとして認識できますから、字余りの余分な1モーラや2モーラは気になりません。しかし句跨ぎは、文節の区切りが明瞭に出るため、場合によっては自由律短歌のようになってしまいます。

おみやげの- 讃岐うどんが- 社名入り封筒の- 中から- あらわれる
 思い出は- ミックスベジタブルのよう- けれど-解凍-しては-いけない
 明けてゆく- トキオの-隅の- 販売機にて- 購いし- 二本の-コーラ
 すれ違いざまに- 会釈を-交せしは- いつもの-八百屋の- あんちゃんなりき

こんなふうに、文節の区切りが明瞭に出てしまいます。そこで定型を意識して、句のまとまりが出るようにしてよみますと

おみやげの- 讃岐うどんが- 社名入り- 封筒-野中- 殻-あらわれる
 思い出は- ミックス-べじ太- ブルのよう- けれど-解凍-しては-いけない
 明けてゆく- トキオの-隅の- 販売機- 2手-購いし- 二本の-コーラ
 すれ違い- ザマに-会釈を- 交せしは- いつもの-八百屋の- あんちゃんなりき

このように、句跨ぎのところで、おかしな調子が出てしまいます。「から」、「ブル」、「にて」、「ザマ」などの無意味な音や無関係な語彙が脳裏をかすめたりします。

一体、短歌に限らず、詩歌では音の響き、音の調子が重要な構成要素に成っているはずです。特に定型詩の場合、その定型性、定型を感じさせる音の調子・音の響きは大事だろうと思います。そして、その定型性は、人によって異なっています。しかも、定型性が人によって異なっていることが、必ずしも総ての人によって認識されているわけではありません。同じ歌を読んでも、字余り・句跨ぎは定型性の違いによって、人により受け取り方が違います。現代の我々ですら同時代の字余り・句跨ぎの受け取り方が違うのです。ましてや、中世や古代の字余りを我々が現代の字余りと同じ受け取り方をしてよいはずはありません。

5

万葉集の短歌について「字余り句の法則」を提唱された佐竹昭広氏に「五七五七七」という論文があり、その中に、宗祇が東国の田舎者と連歌をした話が載っています。

1972.05 佐竹昭広「五七五七七」国文学 17 卷 6 号、(『万葉集抜書』1980.05,岩波書店)

二字足らぬ付句も余る才で詠み

柳多留後期難句選釈の著者、魚沢永二郎氏によれば右の一句は、醒睡笑巻之三「文字知顔」の部所屬、宗祇法師の滑稽話を踏まえて作られたものだという。

宗祇東国修行の道に二間四面のきれいな堂あり。立ち寄り腰をかけられたれば、堂守のいふ、「客僧は上方の人候や」「なかなか」と。「さらば発句の一つせんずるに付てみ給へ」と。

新しく作りたてたる地蔵堂かな

物までもきらめきにけり

と付られし。「これは短い」と申す時、祇公、「そちのいやことにあるかなを足されよ」とありつる。

同題の類話は仮名草子の宗祇諸国物語(貞享二年刊)にも見えるが、句の出典としては、私も醒睡笑の話の方を採りたい。句意も、当然、魚沢氏解の通り、「宗祇法師が、堂守のよんだ字余りの発句にたいして、それにちょうど合うようにして故意に二字足らぬ付句をしたのは、さすがに連歌の宗家だけあつて縦横の歌才に溢れた手捌きぶりであるといった意味」にちがいないと思う。……

宗祇諸国物語の「二字足らぬ付句」は「物ひかる露の白玉」という形、発句は「あたらしく作りたてたる薬師堂かな」という形で示されている。発句の主は田舎の宗匠。宗祇の付句を聞いて、

「誠に僧は連歌未練に侍り。文字ふたつ不足いたし侍る」と。祇こたへて、「いやとよ、我が手習しは歌一首を上下にわけ、発句と付句とになすと侍れば、発句既に二字あまるを此脇にそへて、「あたらしくつくりたてたる薬師堂、かな物ひかる露の白玉」と委細に吟じ教るに、一座肝をけし、宗匠おもなげに成て名をとふに、あからさま白地にもかたらず、猶此所に滞留して一道を指南しけり。是より日毎の連歌間なく一村道を得けり。(巻四、連歌不知国)

「新しく作りたてたる薬師堂かな」「新しく作りたてたる地蔵堂かな」、いずれにせよ連歌の発句としては全くさまになっていない。第一に五七七という音数、第二に発句が必要とする季語の欠落、第三に不用意な漢語の使用。田舎宗匠の面目さすがに躍如たるものがある。

東国での連歌は、『醒睡笑』では、

新しく 作りたてたる 地蔵堂かな —— 物までも きらめきにけり

となっていますが、『宗祇諸国物語』では

あたらしく 作りたてたる 薬師堂かな —— 物ひかる 露の白玉

という連歌で、内容も田舎者の無知をあざ笑うだけの話になっており、佐竹氏は「田舎宗匠の面目さすがに躍如たるもの」と解釈しています。「田舎宗匠」は当時隆盛に向かいつつあった江戸俳壇の宗匠を当てつけたのでしょうが、和歌の定型も知らない宗匠というのはやりすぎです。『醒睡笑』の方は堂守で、和歌のプロではありません。

この笑い話も、文字で読ませたものではなく、声で聞かせたものです。

宗祇が東国を巡っていたとき、あるところに二間四面の奇麗な地藏堂がありました。立ち寄って腰をかけていたところ、堂守が出てきて申しました。「旅の坊様、上方の人ですか?」「なかなか。」「んだば発句を一つしべーから、付けてみれや……………」
あだらすぐ つぐりたでたる づぞどかな
? ?

あたらしく つぐりたでたる ぢぎうだう —— かなものまでも きらめきにけり

これが二条定型です。そして、

'a- ta- ra- ci- ku- tu- ku- ri- ta- te- ta- ru- di- zang dang ka- na-
ka- na- mo- no- man de- mo: ki- ra- mie ki- ni- kie ri:

これが古代定型です。

仮に12世紀から19世紀までの700年をかけて、モーラ語が京都から東北地方の津軽方言の手前まで達したものとしますと、宗祇の活躍した15世紀には、関東地方は、まだ音節語であったと考えられます。和歌や連歌に使う大和言葉は、都の人はそのまま、その時代の新しい読み方で「ゆきながら やまもとかすむ ゆへかな」と発音して、モーラ数で5・7・5と数えます。東国の人は恐らく「'iu- gi- na- ga- ra- 'ia- ma- mo- do- ka- zu- mu- 'ium be- ka- na-」と、5・7・4音節で発音しますが、かな文字の数を「ゆきながら やまもとかすむ ゆふへかな」と数えて、5・7・5と認識したであろうと思われます。しかし、和歌や連歌に使わない「地藏堂」のような言葉、これを都の人は「ぢぎうだう」と5モーラで発音しますが、東国では、di- zang dang と、3音節で発音します。発句は当然「'a- da- ra- zi- gu- tu- gu- ri- ta- de- ta- ru- di- zang dang ka- na-」で、5・7・5になります。宗祇は、都の発句としては無用な「かな」を、すかさず付句の最初に使って、東国式と京都式の両方の連歌を完成させたのです。

6

さて、今でも字余り研究の論文でよく言及されるものに橋本進吉氏の「国語の音節構造と母音の特性」という論文があります。この中で橋本氏は、母音一つだけで出来た音節を**母音音節**と呼んで、母音音節の三つの特異性をあげました。

(18)

1942.02 橋本進吉「国語の音節構造と母音の特性」国語と国文学 19 卷 2 号

- 1 母音音節は語頭にのみ現れる。
- 2 語頭に母音音節を有する語が、他の語の後に結合して複合語を構成する時、その母音音節か直前の音節の母音の一方が脱落する。
- 3 字余りの句に必ず母音音節があるのは、母音音節が一つの音節としての十分の重みを持っていなかったことを示す。

そして、佐竹氏が

1946.05 佐竹昭廣「萬葉集短歌字餘考」文学 14 卷 5 号

句中に単独の母音々説(エを除く)を含有する時はその字余りは差支へない。

という形で字余りを法則化しており、さらに、木下正俊氏は、句中に「あ」「い」「う」「お」を含む字適の句を、

1958.01 木下正俊「準不足音句考」万葉 26 号

字足らずではないが、その五音ないし七音に単母音音節を含み、いはば字足らずに準ずべきもの。

として、「準不足音句」と命名しました。字余りの研究はこの流れを汲んで行われていますが、ここで注意すべきは、橋本氏、佐竹氏、木下氏の3氏が、ともに音節という言葉をもーラの意味で使っていることです。このころはまだもーラという言い方は一般的ではありませんでした。音節という言葉を使っているからといって、古代語が音節語であると思っていたわけではないのです。

古代語が音節語であったという考え方は、方言研究の場から出てきました。音節語の津軽方言・鹿児島方言などが方言周圏を形作っていることがその切っ掛けと成ったのですが、文献研究の面でも、古代・中世のアクセントを研究している桜井茂治氏が提唱しました。

それまでは、だれもが、古代語は現代語と同様にもーラ語であると思っていましたから、どんな事柄でも、もーラ語であることを前提にして研究が行われていました。しかし、こうして、古代語が音節語であるとする考え方が提唱された以上、今度は、古代語のいろいろな現象を、もーラ語を前提にした場合と、音節語を前提にした場合と、両方からアプローチして、どちらの側からの説明が、より自然で合理的であるかを判断してゆく必要が出て来たわけです。

字余りについては、古代語音節語説による説明は明快です。「こぞとやいはむ」も「ことしとやいはむ」も、どちらも7音節で発音できるので、両者の違いを究明する必要がありません。

モーラ語説では「こぞとやいはむ」は7モーラ、「ことしとやいはむ」は8モーラです。しかし、この8モーラはなんとしてでも7モーラ相当だと説明しなければなりません。「字余り環境」と「非字余り環境」との違いを究明することはモーラ語説にとっては絶対に必要な事柄です。

橋本氏の母音音節の第3則に従えば、「こぞとやいはむ」の「い」は重みがあるはずで、「ことしとやいはむ」の「い」は重みがないはずです。この違いを説明するために、現代語には見られない単語の連続と結合の法則が提唱され、現代の短歌には見られない古代短歌リズム論が提唱されます。また、橋本氏の第2則、母音脱落の法則もモーラ語説の有力な論拠になります。

7

母音脱落の法則を以下に纏めておきます。ここでは、ローマ字表記したものは別に、仮名表記のものを「ラ」「リ」「ル」「レ」「ロ」のあとに「ア」「イ」「ウ」「オ」がつながった場合その部分が仮名でどう表記されるか、という形で示しました。双方向の太い矢印は、同じ環境で違う語形が出る場合を示しています。

| | | | | |
|---------------|---------------|------------------|---|---------------|
| tuu → tu わたつみ | | | | |
| | zua → za へざり | ⇔ sua → su ますらを | | |
| | tuo → to そとも | | | |
| gii → gi こぎづる | niu → nu くぬち | ⇔ kiu → ki かきつ | | |
| | sia → sa ささげ | ⇔ | | kia → ke さけり |
| | | sio → si しもふ | ⇔ | kio → ke ゆけひ |
| kaa → ka わかゆ | rau → ru あるみ | | | |
| | rai → ri ありそ | ⇔ gai → gs わがへ | ⇔ | rai → re うれたし |
| | | nao → na うなひ | | |
| | tea → ta たらひ | rei → re かれひ | | |
| | | reo → re あれもふ | | |
| noo → no なみのと | kou → ku よくす | ⇔ kou → ko かりこむ | | |
| | koi → ki ときは | ⇔ toi → to へとふ | ⇔ | toi → te へてふ |
| | noa → na くれなる | ⇔ poa → po おほなむち | | |

ルウ→ル

ルア→ラ⇔ルア→ル

ルオ→ロ

リイ→リ

リウ→ル⇔リウ→リ

リア→ラ⇔

リア→レ

リオ→リ⇔

リオ→レ

| | | | |
|------|------------|------|------|
| ラア→ラ | ラウ→ル | | |
| | ライ→リ⇄ライ→ラ⇄ | | ライ→レ |
| | ラオ→ロ⇄ラオ→ラ | | |
| | レア→ラ | レイ→レ | |
| | | レオ→レ | |
| ロオ→ロ | ロウ→ウ⇄ロウ→ロ | | |
| | ロイ→リ⇄ロイ→ロ⇄ | | ロイ→レ |
| | ロア→ラ⇄ロア→ロ | | |

複合語など母音が連続した場合、その連母音がどう変化するかを説明したのが「母音脱落の法則」です。例えば「国」の「内側」を意味する「くぬち」という言葉は「くにうち」から変化したと考えますと、「にう」という発音が「ぬ」に変化したように見えます。特にローマ字で表記すると/niu/から/i/という母音が脱落して/nu/になったように見えます。モーラ語説の立場からは「クニウチ」が「クヌチ」に変化したのですから、4モーラが3モーラになり、1モーラの脱落です。脱落しているのは確かに母音ですから、母音脱落といえます。しかし音節語説の立場からは「クニウチ」も「クヌチ」も3音節で、変りはありません。変化したのは、iuという重母音が、uuという単純母音に変っただけで、母音の脱落は起きていません。

ここで他の言語の母音脱落らしき現象を見てみましょう。まずS語ですが、日本語の場合と比較しやすいように、ここではローマ字で表記せず、各音節ごとにもっとも近い仮名を当てて示しました。

| | | | |
|------|------|------|------|
| | S 語 | | |
| ルウ→ル | ルイ→リ | | |
| | ルア→ラ | | |
| | ルエ→レ | | |
| | ロオ→ロ | | |
| リイ→リ | リウ→ル | | |
| | リア→ラ | | |
| | リエ→レ | | |
| | リオ→ロ | | |
| ラア→ラ | ラエ→レ | | ライ→レ |
| | ラオ→ロ | | ラウ→ロ |
| レエ→レ | レア→ラ | レイ→レ | レウ→ロ |
| | レオ→ロ | | |
| ロオ→ロ | ロエ→レ | ロウ→ロ | ロイ→レ |
| | | ロア→ロ | |

日本語の場合に引き当てて見ると、これは古代語の母音脱落の状況に近く、しかも、より規則的であるといえます。

次に P 語も同様に示してあります。こちらの方は、双方向の矢印があり、S 語よりも日本語の古代語に近いものになっています。

| | | | |
|------|--------------------------|-------|------|
| | P 語 | | |
| ルウ→ル | ルイ→リ ルア→ラ ルエ→レ | | |
| リイ→リ | リア→ラ⇔リア→リ リエ→レ | | |
| ラア→ラ | | ライ→ラ⇔ | ライ→レ |
| | ラウ→ル | ⇔ | ラウ→ロ |
| レエ→レ | レア→ラ ロエ→レ ロア→ラ | | |

ところで、S 語も P 語もモーラ語ではありません。完全な音節語です。音節語である S 語・P 語を音節ごとに無理やり仮名で表記すると、「母音脱落の法則」が存在するように見えて来ます。

古代日本語も仮名で書いてあると、現代の我々は仮名 1 字が 1 モーラだと思っていますから。ルアがラに変化したとか、ライがラに変化したと考えると、1 モーラ分の母音が脱落したと思ってしまいます。しかし、仮名は、もともとは漢字です。中国語の文字です。純粋に音節語である中国語専用の文字、その漢字を借用して日本語を表記したもの、それが仮名です。仮名は本来音節文字だったのです。ですから、文字の上でルアがラに変化したように見えても、実際は、ルアという重母音音節がラーという長母音音節に変化したものと見ることができます。u という母音が脱落したのではなくて、後続する母音と同じ a に変化したのです〔後方同化〕。ライがラに変化したように見えるのは、ライがラーに変化したのであって、i という母音が脱落したのではなく、直前の母音と同じ a に変化したものなのです〔前方同化〕。このような音変化はどの言語にも起こり得ることです。

音節語である S 語と P 語を仮名で表記すると「母音脱落の法則」が成立するかのようによみえます。しかし、S 語・P 語の文法では、これを母音脱落とは言いません。サンディーとか、**連声**とか呼ぶ母音結合の規則です。S 語と P 語、もちろんこれは、

サンスクリット語とパーリ語のようですが、ここにみられる母音の連声は、別に奇妙不思議な規則ではなく、多くの言語に普通に見られる音変化です。

古代日本語も仮名で表記されていると、「母音脱落の法則」が成立するかのようにはみえます。しかし、これは仮名の1字1字が1モーラを表していると思ひ込み、古代日本語は当然モーラ語であると思っているためにそう見えるのではないのでしょうか。古代日本語は実は音節語であって、サンスクリット語やパーリ語に見られるのと同じような母音の連声が現れているのに過ぎないと言えないのでしょうか。

古代語音節語説の立場からは、母音脱落の法則は必要ありません。音節語説による限り、母音脱落と言われている現象は母音脱落ではないからです。

では、モーラ語の場合はどうでしょうか。現代の日本語では、以下に示したように、母音脱落は起こりません。

ルウ→ルウ みずうみ ルイ→ルイ どぶいた ルア→ルア みずあげ ルエ→ルエ ルオ→ルオ みずおと
 リウ→リウ ききうで リイ→リイ やきいも リア→リア あしあと リエ→リエ リオ→リオ あしおと
 ラウ→ラウ ながうた ライ→ライ やまいも ラア→ラア はやし ラエ→ラエ あまえび ラオ→ラオ ははおや
 レウ→レウ なげうり レイ→レイ ふでいれ レア→レア にげあし レエ→レエ かれえだ レオ→レオ すえおき
 ロウ→ロウ もとうた ロイ→ロイ かおいろ ロア→ロア とこあげ ロエ→ロエ ほほえみ ロオ→ロオ さとおや

「はは」に「おや」がついても「ははおや」となるだけで、「ははや」「はほや」とはなりません。現代日本語で見る限り、モーラ語では母音脱落は起きないのです。しかし、古代語の場合、仮名をモーラ文字と見る限り、母音脱落があるとしか言えなくなります。母音脱落の法則は古代日本語がモーラ語であることを前提にして初めて成立するのです。

| | 母音脱落説 | 連声説等 |
|-------|--------------------------------------|-------------------------------|
| 荒御霊 | ara-mitama>aramitama | ar-mitama>aramitama |
| 荒海 | ara-umi>arumi>arumi | ar-umi>arumi |
| 荒磯 | ara-iso>araiso>ariso | ar-iso>ariso |
| 常夏 | toko-natu>tokonatu | tok-natu>tokonatu |
| 常盤 | toko-ipa>tokoipa>tokipa | tok-ipa>tokipa |
| 常蔭 | toko-kage>tokokage>tokkage>tokage | tok-kangke>tokkangke |
| 学齡 | gaku-rei>gakurei | gak-rei>gakrei>gakurei |
| 学校 | gaku-kau>gakukau>gakkoo | gak-kau>gakkau>gakkoo |
| マゾヒズム | mazohho-izumu>mazohhizumu>mazohizumu | mazox-izm>mazoxizm>mazohizumu |
| サディズム | sado-izumu>sadizumu>sadizumu | sad-izm>sadizm>sadizumu |

8

次に、モーラ語説の立場で字余りを追求して行くと字余りの定型性が問題になってきます。現代の新二条定型では、句の中に単独母音モーラがあろうと無かろうと、字余りには定型性がありません。一方、新京極定型では、単独母音モーラの有無に関わ

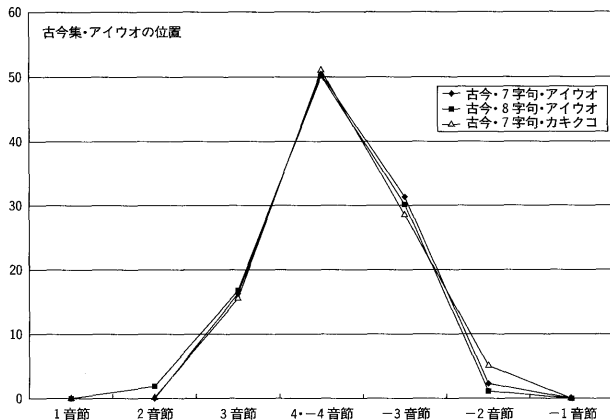
りなく1字程度の字余りは問題になりません。新二条定型の人には、なぜ古代人が「あいうお」のある字余りに定型性を感じたのか、新京極定型の人には、なぜ古代人が「あいうお」のない字余りに定型性を感じないのか、それが分かりません。新二条定型でも、新京極定型でも、古代和歌をモーラとして捉える限り、字余り句の定型性が理解できません。

音節語説の方では、最初から音節の数で捉え、字余り句も、字適い句も同じ定数で捉えられますから、定型性は問題なく確保出来ます。今までにも平安時代の発音あるいは平安時代のアクセントについて多くの研究が行われてきました。それらの成果に従って、それぞれの文字の音価と、それぞれの言葉のアクセントを推定・復元し、音節語として発音すれば、定型性に何の問題も無いことがわかります。平安時代の仮名文字は音節文字として見た場合、母音が短いのか長いのかは分かりません。実際には言葉によって長短の違いがあったとしても、多くの場合、たとえば「ながめ」「長雨」という言葉を nangamie と短く発音しても、nangaamie と長く発音しても、どちらも意味は通じたと思われまゝ。音節の数による定型詩を、しかも母音の長短は区別しなくていいのですから、詩の朗唱・詠唱の際は総ての音節を同じ長さで、つまり母音は長母音か重母音にして唱えれば、句の区切りは、5 7 5 7 7 の音節数によって数えて行くと、和歌の定型性は容易に確保出来ます。

モーラ語説の方では、古代和歌の詠唱に、2モーラ1拍子論を利用します。2モーラ1拍子論というのは、新京極定型の人が新二条定型の枠内で字余りを定型に準じて捉えようとするとき必ず思いつく論法で、新京極定型の人にはそれが真理のように写ります〔上掲、等時音律説の寺杣氏は新二条定型である。氏は字余りについては論じない〕。しかし、新二条定型の人にはチンプンカンプンでしょう〔新京極定型の人にとっての寺杣氏説と同様に〕。それはともかく、現代短歌の字余り解釈に有効と見られる2モーラ1拍子論を古代和歌にも適応しようとする訳です。しかし、2モーラ1拍子論ですと、字余りに「あいうお」が含まれている必要は全く無い訳です。古代の「字余り法則」そのものを否定してしまうこととなります。そこで、この厄介な句中の単独母音モーラをどう料理するかで、「唱詠論」「律読論」「音群説」などが出てきます。これらの説に共通するのは、「単独母音モーラ」つまり「あいうお」が字余り句と字適い句とで頻出する位置が違うことを論拠にしていることです。「あいうお」が字適句では4音目・5音目に集中する、字余り句では集中しない。これは「唱詠」のために、「律読」のせいで、あるいは「音群」によって引き起こされるのである、という次第です。

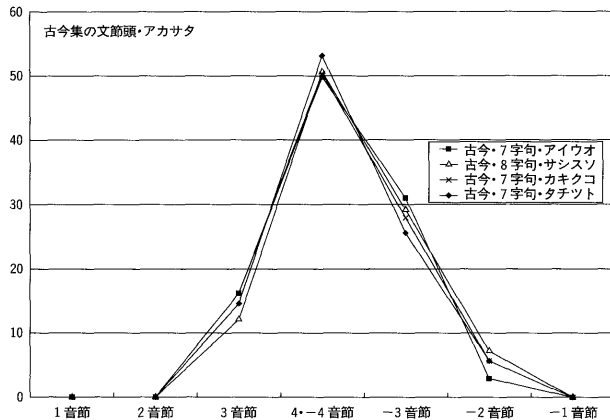
さて、古代語では母音だけの音節は語頭にしか現れません。従って、和歌の中でも「母音音節・単独母音モーラ」は語頭つまり文節の最初になります。ですから、単独母音モーラ・「あいうお」が句の中のどの位置に多く現れ、どの位置に少ないかを論ずるには、句の中がどのように文節に分かれるか、文節の頭・文節頭がどの位置に来やすいか、を見る必要があります。

古代語の文節の長さですが、和歌では3音節・4音節の文節が数が多く、2音節・

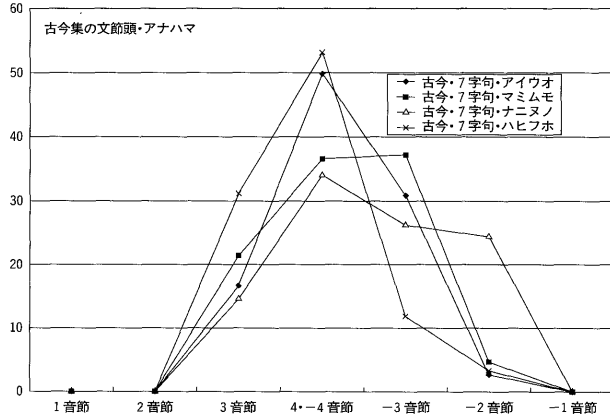


7字句と8字句でアイウオが前から何字目・後ろから何字目というふうに数え、8字句の場合は前からと後ろからの4字目を合してその分布を比較したもの。

古今集の場合、7字句(字適句)のアイウオ(■)と8字句(字余句)のアイウオ(◆)に大異はない。また、カキクコが文節頭となる位置(△)も同様の比率なので、アイウオの場合も文節頭となる位置の分布と見てよい。



7字句(字適句)のアイウオ(■)の位置の分布とカキクコ(×)・サシスソ(△)・タテツト(●)が文節頭となる位置の分布を比較したもの。アイウオと同様の分布を示すものをまとめたもの。



7字句(字適句)のアイウオ(■)の位置の分布とナニヌノ(△)・ハヒフホ(×)・マミムモ(●)が文節頭となる位置の分布を比較したもの。アイウオと異なる分布を示すものをまとめたもの。

5音節はこれに比べると少なくなります。古今集で7音の句の最初に使われる文節の頻度は、2音節・3音節・4音節・5音節の順にほぼ3：8：4：1の比になっています。古今集の7音の句を文節構成の組み合わせで分類すると次のようになります。

| 例 | | 文節頭 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|---------|-------------|-------|---|---|---|---|
| はるはきにけり | 3音節+4音節 | 1118句 | | ○ | | |
| むすびしみづの | 4音節+3音節 | 599 | | | ○ | |
| わがころもでに | 2音節+5音節 | 236 | ○ | | | |
| はるたつけふの | 2音節+2音節+3音節 | 149 | ○ | | ○ | |
| うくひすぞなく | 5音節+2音節 | 143 | | | | ○ |
| われぞふりゆく | 3音節+2音節+2音節 | 88 | | ○ | | ○ |
| まつひとのかに | 2音節+3音節+2音節 | 55 | ○ | | | ○ |

一方8音節の場合はどうかというと、和歌では「字余り句」以外に8音節の句など存在しませんから、比較出来ません。文節の組み合わせは10通りあります。

| 8音節 | 文節頭 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
|-----------------|-----|---|---|---|---|---|
| 3音節+3音節+2音節 | | | ○ | | | ○ |
| 4音節+4音節 | | | | ○ | | |
| 3音節+2音節+3音節 | | | ○ | | ○ | |
| 4音節+2音節+2音節 | | | | ○ | | ○ |
| 2音節+3音節+3音節 | | ○ | | | ○ | |
| 5音節+3音節 | | | | | ○ | |
| 2音節+4音節+2音節 | | ○ | | | | ○ |
| 3音節+5音節 | | | ○ | | | |
| 2音節+2音節+4音節 | | ○ | | ○ | | |
| 2音節+2音節+2音節+2音節 | | ○ | | ○ | | ○ |

古今集の、7字の字適句の母音音節の位置、字余り句の母音音節の位置、文節頭がカキクコになる位置の頻度数をグラフで示しました。字適句の母音音節の分布は、やはり文節頭の分布と同じと見るべきであり、字余句の母音音節の分布も句の最初の部分・句の末尾の部分で字適句のそれと同じ分布を示しています。つまり、母音音節の分布は文節頭の分布と同じであり、字余り現象とは無関係なのです。

9

以上、見てきました通り、字余りについて、古代語モーラ語説からのアプローチでは単語の連続・結合の法則、母音脱落の法則、古代和歌リズム論などの法則を構築し

1 モーラ語（現代日本語）の場合

- 1 短歌の第1・3句では、6モーラ以上、第2・4・5句では8モーラ以上が字余りとして認識される。字余りの句は、その通りに6モーラ又は8モーラで発音される（5モーラ又は7モーラに縮約して発音されることはない）。
- 2 複合語の後部要素が母音で始まる場合、前部要素の末尾母音と連続することになるが、その連母音は2モーラ分として発音される。どちらか一方の母音が脱落して1モーラ分減少するということは起こらない。
- 3 短歌を口誦するとき、字余りは定数律と同じになるように調整して発音される。字余りを素早く短く発音する方法と、2モーラ＝1拍子とし適宜八分休符の取捨で調整する方法がある。短歌の朗詠は詩吟と同様、定数律とは無関係。

2 古代日本語がモーラ語であった場合

- 1 短歌の第1・3句では、6モーラ以上、第2・4・5句では8モーラ以上で、句の中に単独母音モーラがあるときのみ字余りとして認識される。母音連続のある場合にのみ字余りになるのであるから、この連母音のところは1モーラ分に相当し、6モーラ又は8モーラの句は、実際には5モーラ又は7モーラと認識される。一方、字余りでない句にも母音連続は発生し、こちらの方はあくまでも2モーラとして発音される。このように、同じ母音連続のように見えても発音上の違いが生ずるのであるから、そこには何らかの違いがあり、それは単語結合論、シンタックス論、語彙論などの視点で究明されると期待されている。
- 2 複合語の後部要素が母音で始まる場合、前部要素の末尾母音と連続することになるが、その連母音は必ず1モーラ分として発音される。すなわち、古代日本語には、どちらか一方の母音が脱落して1モーラ分減少するという、**母音脱落の法則**の存在が想定され、これの究明が急務となっている。
- 3 短歌を口誦するとき、2モーラの母音連続の部分も1モーラ相当で唱えたとする見方と、口誦のときに一句を必ず二分して唱えるため、この位置に連続母音が来て句中の区切りの働きをするとの見方とがある。朗詠の形態が字余りの存否を決めるとも見られ、古代詠唱論、古代律説論、古代音群論などの視点からの究明が行われている。現代短歌のような2モーラ＝1拍子論は、単独母音モーラの無い字余り句が存在しない以上、古代短歌については通用しない。
- 4 以上、いずれもモーラ語（現代日本語）では起きていない現象であり、同じモーラ語の古代日本語になぜこのような現象が起こるのかも究明する必要がある。

3 音節語の場合、及び、古代日本語が音節語であった場合

- 1 定型詩は音節の定数を数えて定型であることを認識する（音節語でも定型詩では1長音節＝2短音節と数える言語もあるが、古代日本語にはそれは認められない）。古代短歌の定型では、第1・3句は5音節、第2・4・5句では7音節であり、それぞれその通りに5音節又は7音節で発音される。句中の単独母音音節はそのまま1音節で発音する。ただし、直前の母音と合わせて1音節として発音することもできるので、句中に単独母音音節があれば6音節・8音節も定型として認識される。これが古代の字余りである。
- 2 複合語の後部要素が母音で始まり、これが前部要素の末尾母音と連続するとき、区切ることなく発音することができるため、音節語では複合語の方が音節数が少ないことがある。古代日本語にもこの現象が見られる。
- 3 古代短歌を含めて、音節語では定型詩の口誦は、原則として各音節を同じ長さで発音する。
- 4 日本語は中世以後はモーラ語となり、和歌の定型性はモーラ数を数えることで確保されるようになったため、古代定型の単独母音音節を含む句は破調（字余り）として認識されるようになった。

て行く必要がありますが、古代語音節語説からのアプローチでは、字余りについて、これらの法則を成立させる必要がありません。でかすら、この30年間、古代語音節語説の立場から、字余りについての論文はあまり書かれていません。音節語説の立場からは、字余りを研究する必要がないのです。むしろ音節語説は字余り以外の事柄について検証して行く必要があります。

古代語音節語説が提唱される以前から、古代語の研究には蓄積がありますので、その中には古代語がモーラ語であることを前提にした論もあります。上代8母音の区別などもその例でしょう。8母音説、6母音説、5母音説など、いずれも、古代語の母音がモーラ母音であることを前提にして論じられてきました。上代語がモーラ語であるなら、1モーラの発音で、ka ki kī ku ke kē ko kōの8音を区別しなければなりません。この区別が大変だというので、実は6母音だ、実は5母音だといったりします。古代人が現に区別をしている音を、甲乙の区別は音声上の区別であって、音韻上の区別ではないといったりします。

「音節語説」では仮名の一音を音節として捉えますから、その母音は短母音とは限らず、長母音・重母音の場合もあると考えます。でかすら、カ行音の8音はkaa kii kui kuu kie kei kuo kooの8音と考えることも可能です。

次に、清濁について、音節語であれば、清濁の区別は、無声音と有声音のような子音の発音の違いだけでなく、その直前の音節の末尾に鼻音が入るか入らないかの違いによっても示すことができます。また濁音が直前の鼻音によって認識されるということになれば、連濁の意味も違ってきます。言葉が結合することによって清音が濁音に変化するのではなく、鼻音が言葉を結合する機能を果たすということになります。

| | | |
|----|--------------------------|--------------------------------|
| 朝顔 | aca-kapo>acagapo | aca- <u>ng</u> -kapo>acangkapo |
| 我妹 | uaga-imo>uagaimo>uagimo | ua- <u>ng</u> -imo>uangimo |
| 木末 | ko-no-ure>kongure>konure | ko- <u>n</u> -ure>konure |

連濁における濁音不連続の法則も、長音節不連続の法則と言い換えることができます。

| | | |
|----|--------------------|---|
| 人影 | pito-kage>pitokage | pito- <u>ng</u> -kangke>pitokangke×pi- <u>tong</u> -kang-ke |
| 鳥肌 | tori-pada>toripada | tori- <u>m</u> -panta>toripanta×to- <u>rim</u> - <u>pan</u> -ta |

アクセントの史的研究も基本的には古代語モーラ説で考えられているようですが、古代語音節語説を提唱した桜井氏が古代・中世のアクセントを主要研究領域としておられることから分かるように、音節語説・モーラ語説はアクセント研究者にも二者択一的な選択を強いることとなります。音節語がモーラ語に変わったとすれば、会話速度が早く成りますから、アクセントのおそ下がりが起こります。このおそ下がりにな

ったアクセントがまだモーラ語になっていない東国や中国地方に、高さが後ろにずれたアクセントとして伝わり、東国や中国地方ではそれを受け入れた後にモーラ化が進行したと考えることもできます。一方京都では 猿・婿などの2音節語が完全な2モーラにはなりきれず、松・笠とは違うアクセントになったと見ることもできます。

このように音節語説では「清濁の区別」「音節語の方言」「あいまい一型アクセント」「秋田・大分型のアクセント」「東京・広島式のアクセント」「京都式アクセントの松・笠と猿・婿の区別」などが圏論的に捉えられます。

| 中国語 | | 日本語 | | | アイヌ語 | | |
|-----|--------|-----|------|------|------|------|-----|
| ta | ta | 京都 | 東京 | 秋田 | 青森 | 北蝦夷道 | |
| tha | tha da | 現代 | 室町 | 鎌倉 | 平安 | 奈良 | |
| 隋唐 | 南北朝 | 石=山 | 石=山 | 石/山 | 石/山 | | |
| | | 松/猿 | 松=猿 | 松=猿 | 松=猿 | | |
| | | 京都 | 広島 | 大分 | 鹿児島 | | |
| 音節語 | 音節語 | 現代 | モーラ語 | モーラ語 | モーラ語 | 音節語 | 音節語 |
| | | 室町 | モーラ語 | モーラ語 | 音節語 | 音節語 | 音節語 |
| | | 鎌倉 | モーラ語 | 音節語 | 音節語 | 音節語 | 音節語 |
| | | 平安 | 音節語 | 音節語 | 音節語 | 音節語 | 音節語 |

モーラ語説では京都の発音とアクセントは平安時代から現代まで基本的には変化していない、と捉えます。圏論的に見えるのは、それらの音変化がごく普通に、世界中のどこでも起こり易い変化だから、その種の変化は辺境の方でこそ早く起こるのだ、と説明します。

このように、古代語が音節語であると仮定すると、いろいろな現象を違った形で見ることが出来ます。もちろんそういった見方が正しいかどうかとも究明して行く必要があります。ともかく、今までお話ししてきましたことから、お分かりのように、古代語音節語説と古代語モーラ語説とは研究者がいずれか一方に所属して、対立・論争すべきことがらではありません。古代語を研究するにあたって、いろいろな言語現象を「音節」として考えたらどうなるか、「モーラ」として考えたらどうなるかと、各自がそれぞれに究明し、理解して行く事柄です。特に、字余りの研究は、古代語音節語説がこれを論拠にしていると受け取られがちですが、実際は古代語音節語説を仮説として立てると字余り現象が明快に説明できるというだけのことです。古代語音節語説は字余りをすでにクリアしていると言ってもよく、字余りの研究を進めれば、古代語の音節構造なりモーラ構造なりが解るといってもありません。字余り研究は、むしろ古代語モーラ語説の弱点の部分を補強する方向で行われていると言えます。その意味で、字余り研究は、研究者自身が気づかぬうちにモーラ語説の立場に立たされてしまうように見受けられます。そこで、私は敢えて徹底して古代語音節語説の立場に立って説明を試みました。古代語モーラ語説と古代語音節語説と、もし将来いずれ

かに決着が着いたとき、それまでの研究蓄積が烏有に帰するということが無いように、古代語・古代文化の研究に当たられる方は、現時点では判断を急ぐことのないようにしていただきたいと思います。

文献

1816. — 富士谷御杖『北辺隨筆』日本隨筆大成第八卷
 1927.02 土井光知『文学序説』
 1932.08 斎藤茂吉「短歌声調論」(『短歌講座』第4巻 概論解説編)
 1932.11 横山青蛾「万葉集の韻律的考察」国語と国文学9巻11号
 1933.06 横山青蛾「三代和歌集の韻律的考察」国語と国文学10巻6号
 1935.04 吉永千之「万葉集字余母韻の特殊現象に就て」文学3巻4号
 1936.08 吉永千之「万葉声調の分析的研究——長句字余(三分節構成)に於る純母韻に関する一研究——」国語・国文6巻8号
 1937.02 吉永千之「万葉破調の音数律とその諸調性(並に記短歌の音数律)」国語・国文7巻2号
 1942.02 橋本進吉「国語の音節構造と母音の特性」国語と国文学19巻2号
 1942.08 岸田武夫「上古の国語における母音音節の脱落」国語と国文学19巻8号
 1943.05 千葉徳二「山家集に於ける字余り歌について」国学12
 1946.05 佐竹昭廣「万葉集短歌字余考」国文学17巻6号
 1948.12 岸田武夫「上代国語に於ける所謂「約音」について」国語と国文学25巻12号
 1955.09 高橋良雄「字余り歌論」学苑181
 1956.12 鈴木淳一「玉葉和歌集における字余り句の性向」北海道学芸大学紀要7巻2号
 1957.09 岸田武夫「国語における音節の脱落について(一)——連音頭部における音節の脱落——」京都学芸大学学報11号
 1957.12 森山 隆「上代における母音音節の脱落について」語文研究(九州大学)6・7号
 1958.01 木下正俊「準不足音句考」万葉26号
 1958.03 岸田武夫「国語における音節の脱落について(二)——連音中部・末部における音節の脱落——」京都学芸大学学報12号
 1960. — 中田祝夫「短歌音調と国語音韻史との一問題——字余り句とその音価に関して——」短歌研究9-10
 1962.12 渡部 保「西行の歌について——その字余り歌鑑賞——」佐賀総合学舎紀要9・10号
 1967.12 桜井茂治「中世京都方言の音節構造——そのシラビーム的性格について——」文学・語学46号
 1968.02 鶴 久「上代の借訓仮名と母音脱落現象をめぐって」万葉66号
 1968.07 桜井茂治「古代日本語の音節構造について——その特質と解釈——」國學院雜誌69巻7号
 1968.08 川端善明「名詞の活用以前——母音の脱落・交替・同化について——」文学史研究(大阪市立大学)10号
 1969.04 浜口博章「玉葉和歌集の表現——字余り歌について——」国語と国文学46巻4号
 1970.11 小野 寛「大伴家持短歌の字余り句——その結句において——」論集上代文学1冊
 1970.12 渡辺修・寒河江実「古今集の“字余り”」計量国語学55号
 1970.12 小野 寛「万葉集字余り結句管見」学習院女子短期大学紀要8
 1971.06 山口佳紀「古代日本語における母音脱落の現象について」国語学85集
 1971.09 桜井茂治「万葉集のリズム——字余りと音韻構造——」國學院雜誌72巻9号
 1971.12 川上 泰「古今集字余りの発音」(国学院大学)国語研究32号
 1972.02 埴穀比古「字余りと破調」万緑27巻2号
 1973.03 ヒューバー、E・トーマス「字余りから見た日本の音」ユリイカ昭和48年3月号
 1974.07 Yamamoto, Susumu「On accounting for Ziamari(Hypermeter)」(『Descriptive and Applied Linguistics』)
 1975.03 本郷洋子「西行の歌と字余り句」香椎鴻20巻
 1976.06 遠藤邦基「古代語の連母音——音節構造の立場から——」王朝九冊
 1977.11 山口佳紀「上代における音節の脱落」論集上代文学8冊
 1978.03 毛利正守「万葉集に於ける単語連続と単語結合体(資料編一)」山手国文論叢1号
 1978.08 青瀬淳子「万葉集短歌字余りについて」島大国文7号
 1979.03 村山昌俊「短歌字余りと音余り——その類型について——」國學院雜誌80巻3号
 1979.03 水島義治「東歌の詩形——東歌に於ける字余り・句絶及び結びの形態について——」語文(日本大学国文学会)47号
 1979.03 毛利正守「万葉集に於ける単語連続と単語結合体(資料編2)」山手国文論叢2号
 1979.04 毛利正守「万葉集に於ける単語連続と単語結合体」万葉100号
 1979.12 毛利正守「『サネ・カツテ』再考」万葉102号

- 1980.07 毛利正守「万葉集・旋頭歌の字余り」万葉 104 号
 1980.12 西田悦子「万葉集の定型の問題——第一句不足音句の訓について——」万葉 105 号
 1980.12 毛利正守「古今集の字余り」親和国文 15 号
 1981.03 毛利正守「万葉集の字余り——そのひとつの形——」万葉 106 号
 1981.03 毛利正守「万葉集の字余り——句中単独母音二つを含む場合——」国語と国文学 58 巻 3 号
 1981.06 毛利正守「万葉集のヤ・ワ行の音声——イ・ウの場合——」万葉 107 号
 1982.02 毛利正守「『物念』の訓読をめぐって」万葉 109 号
 1982.07 毛利正守「古代和歌の字余りの法則性について」三省堂ぶっくれつと 39
 1982.07 佐藤栄作「万葉集の字余りと半母音」国語学研究与資料 6 号
 1982.07 中村直子「平安朝和歌の字余り——八代集にみる——」東海女子短期大学紀要 8 号
 1982.08 服部四郎「毛利正守氏の『万葉集ヤ・ワ行の音声——イ・ウの場合——』について」月刊言語 8
 1982.11 毛利正守「万葉集ヤ・ワ行音を含む字余り」(『小島憲之博士古稀記念論文集 古典学藻』)
 1982.11 毛利正守「万葉・古今の脱落・同化現象——言(イ)フを通じて——」国語と国文学 59 巻 11 号
 1982.12 毛利正守「万葉集・オモフの字余りと脱落現象」親和国文 17 号
 1983.01 毛利正守「万葉集・長歌の字余り」万葉集研究 11 号
 1983.05 毛利正守「短歌の字余りとモーラ」国文学(学燈社)28 巻 7 号
 1983.12 佐藤栄作「万葉集の字余り、非字余り——形式面、リズム面からのアプローチ——」国語学 135 集
 1984.09 毛利正守「万葉集のリズムに関する基礎論——合わせて佐藤氏の御論に答える——」国語学 138 集
 1984.12 毛利正守「万葉集巻一の八番「今者許芸乞葉」の訓読をめぐって」万葉 120 号
 1985.06 坂野信彦「王朝和歌の律説法——単独母音を手がかりに——」文学 53 巻 6 号
 1985.09 毛利正守「万葉集における縮約現象——「有り」の場合——」国語と国文学 62 巻 9 号
 1985.09 毛利正守「万葉集に於ける字余りの様相——有(ア)りの場合——」万葉集研究 11 号
 1987.02 毛利正守「音群に基づく平安朝和歌の唱詠——『詞華和歌集』の単独母音を手がかりに——」文学 55 巻 2 号
 1987.03 神作光一「短歌用語の基礎知識 5 破調(字余り・字足らず)」短歌 34-3
 1987.10 寺祉雅人「平安朝和歌のリズム——単独母音を含む非字余り句からの考察——」尾道短期大学研究紀要 36-2
 1988.04 毛利正守「上代日本語の音韻変化——母音を中心に——」国語国文 57 巻 4 号
 1988.09 赤瀬信吾「藤原定家の和歌表現——字余り句の機能をめぐって——」和歌文学の世界 13
 1988.12 毛利正守「東歌及び防人歌における字余りと脱落現象」(大阪市立大学文学部)人文研究 40-3
 1989.11 毛利正守「万葉集の五音句と結句に於ける字余りの様相」万葉集研究 17 号
 1990.05 山口佳紀「字余り論はなにを可能にするか」国文学(学燈社)35 巻 5 号
 1991.12 毛利正守「上代語における母音変化の様相——V2>V3、CV2=助詞——」(大阪市立大学文学部)人文研究 43-1
 1992.03 屋名池誠「母音脱落——日本語上代中央方言資料による形態音韻論的分析——」(大阪女子大学国文学科紀要)女子大文学 43
 1992.12 毛利正守「万葉集の句中に於ける母音の位置」(大阪市立大学文学部)人文研究 44-13
 1993.01 毛利正守「音韻変化とその周辺——母音を中心に——」武蔵野文学 40
 1993.09 毛利正守「万葉集の「音韻的」音節」と唱詠のあり方をめぐって」国語学 174
 1994.一 吉井 健「万葉集における母音脱落を想定した表記」万葉 152 号
 1995.05 坂野信彦「万葉和歌の詠唱法と字余り・非字余り」文芸研究(東北大学) 139 号
 1995.12 石川聡実「字余り歌における「消(き)え」と「消(け)」——『伊勢物語』六段歌について——」叙説 22 号
 1996.05 毛利正守「字余り論は歌の訓をどこまできめられるか」国文学(学燈社)41 巻 6 号
 1996.07 毛利正守「万葉集歌を通して観た母音論——イとウの場合——」万葉 158 号
 1997.09 長嶋和彦「意識される修辞としての「字余り」——定家の和歌を中心に——」字大國語論究 9 号
 1998.04 毛利正守「古代日本語の音節構造の把握に向けて」(佐藤武義編『万葉集の世界とその展開』白帝社)
 1998.05 毛利正守「古代日本語に於ける字余り・脱落を論じて音節構造に及ぶ——万葉(和歌)と宣命を通して——」国語と国文学 75 巻 5 号
 1999.03 権 景愛「上代日本語の母音脱落とアクセント——融合表示の手段としての両者の相関性——」日本語と日本文学
 1999.06 権 景愛「上代日本語における母音脱落——音数律との関連に着目して——」国語学 197
 1999.06 毛利正守「古今集における母音の在りよう」(『大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集』)
 1999.06 吉井 健「『と思ふ』を句頭にもつ歌」(『大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集』)
 1999.12 佐野 宏「母音脱落現象と語構成」国語学 199
 2001.10 毛利正守「古代の音韻現象——字余りと母音脱落を中心に——」(日本語研究会『日本語史研究の課題』)
 2001.11 村田右富実「万葉集研究におけるコンピュータ利用の側面——万葉短歌の字余りを中心に——」文学・語学 171 号

- 2002.03 山本啓介「平安和歌における字余り歌——『古今集』時代から『千載集』時代まで——」青山語文 32 号
 2002.11 工藤 隆「歌詞の定型とメロディーの定型」武蔵野文学 51
 2002.12 佐野 宏「東歌・防人歌の母音脱落現象について」福岡大学日本語日本文学第 12 号
 2002.12 山本啓介「『新古今集』時代に見られる新種の字余り歌について——西行歌を中心に——」和歌文学研究 85 号
 2003.01 柳田征司「複合によって語中に生じた母音連続における母音の脱落について」国語学 54 巻 1 号(212 号)
 2003.03 山本啓介「中世前期の字余り歌とその意識——慈円・後鳥羽院・定家を中心に——」青山語文 33 号

(付)理解されない古代語音節語説

田中 登「学会時評 中古」国文学(学燈社)47 巻 12 号 2002.10

山本啓介「平安和歌における字余り歌」(青山語文 32 号、3 月)は、古今集から千載集までの字余り歌の実態を調査し、併せて、当時の歌人たちが字余り歌をどのように意識していたかを明らかにしたもののだが、勅撰集以外の諸資料をも調査対象としたスケールの大きい論として、興味深く読むことができた。

清水 史「書評 桜井茂治著『日本語の音・考——歴史とその周辺——』」国語学 54 巻 1 号(212 号) 2003.01
 ここでは、字余りに関する小野寛、トーマス・ヒューバー、村山昌俊の三氏の論考が主として取り上げられているが、いずれもシラビーム構造説を否定するものではないと論破している。「おわりに」の部分で著者は次のように総括する。

三氏の論考に共通して言えることは、資料は精緻だが、その資料を解釈する時点での理論的基盤が、あるいは原理が弱いのではないかということである。私はその点でその原理を日本語の音節構造とそ

の変化に求めたのであるが、これは二〇年余り経った現在も変わっていない。(309 頁)
 これはしかし、三氏にとっては少々迷惑な総括ではなからうか。小野氏の論考の興味は文学の立場からのものであり、この点については著者も「この論文には、国語学的な視点からの興味はないといつてよいであろう」と述べている。後の二氏についても、ヒューバー氏のものにはシタックスの観点からする記述的研究であり、村山氏のものも類型論的な観点からする研究であって、それぞれに論じる視点が異なっていることを、まず総括の前提とすべきである。むしろ筆者としては、原理的な面で大きな問題を投げかけている佐藤栄作(1983)や毛利正守(1984)が正面から取り上げられることなく「字余りを口誦と関連づけて解釈しようとする説には賛成できない」という一文をもって退けられていることに、遺憾の念を禁じ得ない。本書のようなところでこそ述べられて然りなのではなからうか。

古代語が音節語であるか、モーラ語であるか確定すること(立証法)ができないのであるならば、古代語の論考では常に二通りの前提を立てて論証すること(検証法)が必要である。しかし、論者の中には「古代語音節語説」が理解できないまま持論を展開する例が無くはない。それが、無理解の結果だとしても、公論となった以上、その持論の成論によって「古代語音節語説」を否定し、「古代語モーラ語説」を支持した論考として扱われるのは当然である。そして、それらの文芸評論、シタックス論、類型論、字余り意識論が、「古代語モーラ語説」が立証された場合と前提に論じられている以上、「古代語音節語説」が承認された暁には、ほとんど無意味な論となるであろう」と総括されることもやむを得ない。また、「古代語モーラ語説」のウィークポイントを古代口誦論で説明しようとする方向は、「古代語音節語説」を否定できるものでも立証できるものでもない(「古代語音節語説」と無関係な)ので、「古代語音節語説」の立場から一切言及しないのも一つの見識である。